

終章

本研究の目的は、学校の美術教育における言語活動（擬態語）を介して得られる質感の教育方法について、デジタルカメラによる表現の教材開発を通し、その具体的な方法を提案することである。結論では、第1部の理論研究、第2部の実践研究を踏まえ、以下の4つの観点でまとめる。

第1節では、美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する基礎理論と実践的検証について、各章の結論をまとめる。第2節では、本研究によって導き出された教材について述べる。第3節では、学校の美術教育における言語活動（擬態語）を介して得られる質感の教育方法が、これからの学校教育にとってどのような意義をもたらすのかについてまとめる。第4節では、今後の課題についてまとめる。

第1節 本研究の総括

第1部では、美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する基礎理論を導出するため、美術教育における言語活動、質感、表現媒体としての写真について、それぞれ論究した。第2部では、第1部で導出した基礎理論を基に、美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する実践的検証を行った。検証方法としては、始めにデジタルカメラと言語（擬態語）を用いた授業を構築し、それを基に行った小学校と中学校における授業実践を分析し、美術教育における言語活動の新たな教育方法を提示した。

第1部第1章では、美術科教育に求められる言語活動について、学習指導要領より示し、続いて丸山圭三郎、ソシュール等の理論より言語の構造を示し、美術教育における言語活動の重要性を論究した。さらに、美術教育における言語活動の特質について先行研究を踏まえ、教科における言語利用の教育的効果について論述し、基礎理論を示した。

第1部第2章では、言語を介して経験する「質感」についての基礎理論を、ジョン・デューイと茂木健一郎の論よりまとめた。デューイは、ロックと同様に自然の中の性質を3つに分類し、芸術表現において扱う対象は、自然の中でも第2性質となる「感覚的性質」であると述べている。茂木もロックの分類に則して、第1性質を数や量など自然科学の対

象になるもので、第2性質を自然科学が対象としてこなかったもので、言語等のシンボルでも捉えられない色彩や音色、猫の毛の「ふわふわした感じ」などの「質感」を指すとし、デューイと茂木いずれも自然の中の性質でも数量等として捉えることのできない色や音等を第2性質と捉え、これを「感覚的性質」または、「質感」と特定し、美術教育に必要な性質として導出した。この「質感」が美術において、感じる感覚と言語とのつながりを生むとし、本論文におけるキーワードとなる。

続いて、この「質感」について具体的な事例として、北極圏に住むイヌイットの人々と画家パウル・クレーに関する内容を取り上げ、質感の感受による深層意識の構築と、それに伴う言語との関係性を論述した。環境によって得る質感の感受は、深層意識において差異を持って明確なものとなり、生活や表現を支える経験となることを導出した。続いて、本研究で用いられる擬態語の性質について、言語の中でもより身体感覚に近い言語として認識されていることを導出し、美術教育で用いる教育的効果について論述した。

第1部第3章では、学校教育における「写真<デジタルカメラ>」の扱いについて、教科書と学習指導要領より、歴史的変遷をまとめ示した。さらに、芸術表現における写真の価値を明確にし、美術教育における「写真<デジタルカメラ>」の教材として必要性を提示し、その教育的効果を導出した。

第2部の実践的検証では、第1部の基礎理論に基づき、小学校と中学校における実践授業構築と授業実践の分析をまとめた。

第2部第1章では、第1部の基礎理論を基に、デジタルカメラと擬態語を介して得られる質感に関する授業の構築を行った。

第2部第2章では、小学校においてデジタルカメラと擬態語を介して得られる質感の感受に関する授業実践内容とその分析を提示した。授業実践分析からは、デジタルカメラによる表現を教材とした言語活動と「質感」の感受との関連について導出した。

第2部第3章では、中学校におけるデジタルカメラによる表現活動として、言語活動を介して得られる質感の感受に関する二つの授業実践と分析によって、デジタルカメラによる表現を教材とした言語活動と「質感」の感受との関連について論述した。

そこで、本研究のまとめとして、言語活動を介して得られる質感の教育方法について提示する。

本研究では、美術教育を通じ、質感と言葉につながりを構築し、その言葉の獲得の際に他者の存在が欠かせないことを論じ、ここに学校教育における重要な学びがあることを導

出した。美術にとって、感性が作品とどのようにつながりを持ち、感じたことがどれだけ作品に反映できたのかという目に見えない内容が含まれる。しかし、擬態語には、感覚的言語としての特徴があり、擬態語の利用が個々の内側にとどまっていた感覚を表出する役割を持っていることが、授業実践より実証された。経験によって言葉の意味が定着するということは、その過程に学びが存在していることになる。

以上の、第1部の基礎理論によって導出された理論による第2部の実践検証によって、本研究の目的である、学校の美術教育における言語活動（擬態語）を介して得られる質感の教育方法について、デジタルカメラによる表現の教材開発を通して提案する内容は、次のようになる。

第2節 本研究によって導き出された教材

1. 教材開発

教材の条件として、デジタルカメラ、擬態語、質感の感受の活用が挙げられる。誰もが持つ質感の感受を基に、デジタルカメラと擬態語を用いることで、誰もが美術作品としての表現を可能にする。さらに、感覚の言語化により、他者との質感の共有を可能にする。

2. 教育方法

①美術教育における言語活動では、言語（擬態語）と感覚とのつながりを認識し、美術表現において個々人の深層意識や唯一無二の質感に触れさせるようにする。

②美術教育における質感の感受は、擬態語を介在させ、写真<デジタルカメラ>を用いた美術表現を行うことで、質感の差異による取舍選択が行われるようにする。このことは、グループ活動を行うことで、他者との感覚の差異が認識され、質感に対する意見交換が生まれる。

③美術教育における写真<デジタルカメラ>の利用は、カメラ機器を媒体とし擬態語によって発生した質感を感受させる。美術表現として具現化し認識することで、感覚と言語とのつながりを築くことを可能にする。さらに、デジタルカメラの特徴である液晶モニターによって、撮影時、撮影したものを確認することで即時的に質感の取舍選択が発生し、より理想的な表現への創造性を発生させる。

3. 質感を伴う言語活動による新たな教育的視点

直接的体験によって獲得した質感は、環境によって構築される。学校という場、他者の存在によって発生する状況は、五感を通して感じ取ることで学びを生む。さらに、感性的言語である擬態語によって、言葉と質感との結びつきが発生し、五感を介した言葉の意味の獲得が行われる。言葉の概念は、その言葉を体験し経験化することで、言葉として生成される。さらに、擬態語とともに直接的体験を行うことは、他者の感じた内容の共有を可能にし、自身の内側に発生する感覚や思考との比較検討が行われ、対象を的確に感じ取ることを可能にする。そこには、取捨選択によって得た質が発生する。質は、言葉と結びつくことで、経験へと変化すると言える。図 29 では、この流れについて示している。

教科としての学びの一端は、作品構築の流れに即して起こる「体験」にある。この教材では、人間の根幹を構築する経験として、グループで活動することで他者の存在を認識し、個人活動とは異なる体験を獲得することができる。その中心として擬態語を用い、活動が展開される。作品の表層が構築されるまでの制作過程には、言語活動による行為の明確化と、擬態語を用いることで得る体験の具体化がある。

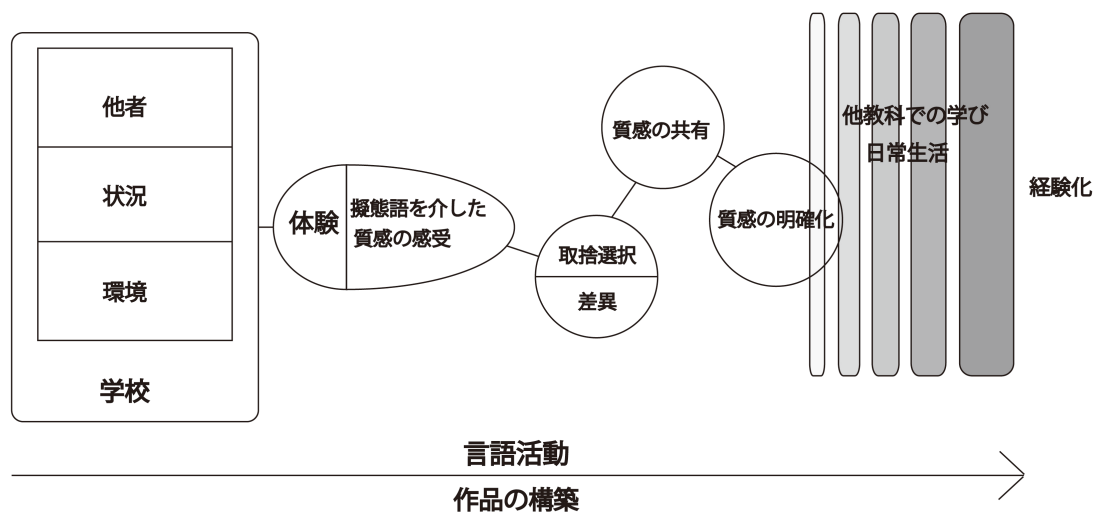


図 29 擬態語を介した学びの構造

第3節 これからの学校教育における本研究の意義

この教育方法を用いることの意義として、体験の経験化が上げられる。子どもたちの学校での体験は、経験化されたとき初めて学びの花が咲くと言える。もちろん、体験したことが生活のなかで長い年月を経て、経験化することも考えられる。本研究で行った言語活動は、知識としての学びにのみあるのではなく、環境や状況において言葉そのものを体験的に獲得することにより、言葉の質を得ることにある。直接的な体験は、五感を介した体験とともに言語化が行われ、言葉の持つ意味に変化を与える。それは、「言葉の質を学ぶ」経験と言える。その入り口として、より感覚に近い言語である擬態語は、重要な役割を担っている。

学校教育における言語活動には、知識の獲得の他に伝達のために言葉を用いる活動と共に、想いや感じたことの言語化が想定される。そこには、経験を基にその場で「感じたこと」を言語化することで、目には見えない感情や感覚を他者と共有することが挙げられる。本来、唯一無二である人間の感覚は、言葉の存在によって他者との共有を可能にしている。そこには、伝え合う行為によって、似た経験から質感の差異を埋め、感覚の共有を発生させる。つまり、他者が話す内容の理解には、自身の経験がその判断を行っていると言える。本研究で示した直接的体験と質感と言葉とのつながりは、本来人間が持つ当たり前の力であるが、それは、育てる必要のある力であり、その意味で学校という意図された環境において学び育て、経験の量と質を上げることで豊かな人間を形成することにつながると言える。

丸山が「ラング化される前のランガージュは象徴作用が生ずる現場の形とリズムをも示しているのであり、そこで絶えずゆれ動く差異は決して既成の観念や事物の代行・再現物ではない。」と述べていることから、言葉の獲得、意味の生成として美術が学校教育において欠かせないものであり、今後も重要な役割を担うであろうことが理解できる。

デューイは、『経験としての芸術』のなかで、芸術における経験について以下のように述べている。「芸術作品は人間経験から離れてそれじしん独立して存在する建築物・書物・絵画・彫刻などとみなされる。ところが、芸術のほんとうの働きは、その作品が経験において、そしてまた経験にかかわって何をなすかということである。」さらに、「芸術作品は経験のなかで生まれ、経験のなかで作用する。ところが、芸術作品がこの二つの事実から切りはなされると、作品のまわりには一つの壁が築かれてしまう。そしてこの壁は、美学の対象

である芸術作品が持つ本来の意味をほとんど見えなくしてしまう。つまり、芸術は或る別世界に移されてしまい、人間が芸術以外の形でおこなうあらゆる努力・苦難・偉業といった経験の内容や目的とは、無縁のものとなってしまふ。」と述べている¹⁾。

芸術は、作品が独立し存在するのではなく、それを生み出した人間の経験が根底にあり、その表層に提示したものが芸術作品として実体を持つと言える。本研究では、このことの一部を担う教材の提示を行った。表層に表れる技術（テクニック）に優劣をつけることへの関心は、教育現場において必ず起こる。しかし、本来ならば、デューイが述べているように、経験と切り離して作品は成立せず、生徒自身がその時何を感じ、これまで何を経験してきたのか、ということを経験の内側に意識させ、それを実体の中心に置き、色や形を纏うことが求められる。そして、その作品を介し、自身の経験に再度触れることが学びの重要な点である。技術面に関しては、このことを前提に置いた上で、磨き上げていくことが求められる。このことは、美術が人間形成を担う教科として、学校教育にとって欠かすことのできない存在であることを示していると言える。

第4節 今後の課題

学校教育における言語活動は、今後さらに議論を行う必要がある。言語を人間の根幹に置き発展的に議論を行うことによって、これまで以上に「心を育てる教育」の重要性を示すことが可能になると考えている。そして、学校での学びには、知識を得ることと同時に、感覚や感性、いわゆる「心」を育てる場として機能する必要がある。そのためには、造形、美術における学びが欠かすことのできない要素を担っている。本研究では、その一端を担う教材を示した。人間が持つ当たり前の力を再認識し、学びの土台を構築することが今後も求められる。その意味において、質感と言葉との関係性は、これからも重要なテーマとなる。

今後の課題として、五感を介して発生する質感の重要性をさらにひも解き、幼児教育といった学びの出発点においても研究を行う。そして、本研究で示した教材を様々な年齢で実践し、質感と擬態語についての更なる検証を行う。

さらに、デジタルカメラ〈写真〉という媒体の持つ教育的効果を実証するとともに、その中に含まれる表現としての新たな可能性の検証を行う。

終章の註

- 1) ジョン・デューイ, 栗田修訳, 『経験としての芸術』, 晃洋書房, 2010年, p.1。

文献目録

参考引用文献一覧

- 1) E・W・アイズナー著, 仲瀬律久他訳, 『美術教育とこどもの知的発達』, 黎明書房, 1986年。
- 2) 相田隆司, 「生徒の周辺を写真映像で作品化させる試み—生徒は写真を通して何を表現するのか—」, 『美術教育学』第19号, 1998年, pp. 1-13。
- 3) 赤木恭子, 「美術教育における映像メディアの「対話性」に関する研究—イメージによる経験を中心に—」, 『大学美術教育学会』第34号, 2001年, pp. 17-24。
- 4) 飯沢耕太郎監修, 『カラー版 世界写真史』, 美術出版社, 2004年。
- 5) 荻阪直行, 『感性のことばを研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』, 新曜社, 1999年。
- 6) J. カラー, 川本茂雄訳, 『ソシユール』, 岩波書店, 1978年。
- 7) 金田一春彦, 『擬音語・擬態語辞典 角川小辞典=12』, 角川書店, 1978年。
- 8) 佐々木健一, 『美学事典』, 財団法人東京大学出版会, 1995年。
- 9) 佐々木正人, 『からだ: 認識の原点』, 東京大学出版会, 1987年。
- 10) 佐原理, 「美術教育における映像メディアの位置づけ—教科書にみる映像メディア教育の方向性—」, 『美術教育学』第32号, 2011年, pp. 163-172。
- 11) 佐原理, 「美術教育における映像メディアの活用で育む多重知性—体験的映像教育のための構造を授業実践から考える—」, 『名古屋文理大学紀要』第11号, 2011年, pp. 87-96。
- 12) フェルディナン・ド・ソシユール, 相原奈津江・秋津伶訳, 『一般言語学第三回講義』, エディット・パルク
- 13) フェルディナン・ド・ソシユール, 小林英夫訳, 『一般言語学講義』, 岩波書店, 1940年。
- 14) 滝沢武久, 『子どもの思考力』, 岩波新書, 1984年。
- 15) 丹野眞智俊, 『オノマトペ《擬音語擬態語》をいかす クオリアの言語心理学』, あいり出版, 2007年。
- 16) デイヴィッド・J・チャーマーズ, 林一訳, 『意識する心—脳と精神の根本原理を求めて』, 白揚社, 2001年。

- 17) ジョン・デューイ, 栗田修訳, 『経験としての芸術』, 晃洋書房, 2010年。
- 18) 町田 健, 『ソシユールと言語学 コトバはなぜ通じるのか』, 講談社, 2004年。
- 19) 丸山圭三郎, 『言葉と無意識』, 講談社現代新書, 1987年。
- 20) 丸山圭三郎, 『ソシユールの思想』, 岩波書店, 1981年。
- 21) 丸山圭三郎, 『ソシユール小事典』, 大修館書店, 1985年。
- 22) 松原郁二, 『人間性の表現と教育—新しい美術教育理論』, 東洋館出版社, 1972年。
- 23) 港千尋, 『映像論〈光の世紀〉から〈記憶の世紀〉へ』, 日本放送出版協会, 1998年。
- 24) 宮沢賢治, 『注文の多い料理店 (新装版) 宮沢賢治童話集 1』, 講談社, 2008年。
- 25) 茂木健一郎, 『心を生み出す脳のシステム「私」といミステリー』, 2001年。
- 26) 茂木健一郎, 『脳とクオリア—なぜ脳に心が生まれるのか』 日経サイエンス社, 1997年。
- 27) 文部科学省, 『言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】』, 2011年。
- 28) 文部科学省, 『中学校学習指導要領解説』, 日本文教出版株式会社, 2008年。
- 29) 文部科学省, 『言語活動の充実に関する指導事例集—思考力, 判断力, 表現力等の育成に向けて—【中学校版】』 2011年。
- 30) 文部科学省, 『中学校学習指導要領』, 東山書房, 2008年。
- 31) 森有正, 『生きることと考えること』, 講談社現代新書, 1970年。
- 32) 西川長夫, 「甦るソシユール」, 『フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学講義 第三回講義 コンスタンタンによる講義記録』, エディット・パルク, 2003年。
- 33) 西園芳信, 「デューイ芸術的経験論にみる表現内容としての感覺的性質に関する考察」 『日本デューイ学会紀要』 第45号, 2004年, pp.162-169。
- 34) 藤岡喜愛, 『イメージと人間 精神人類学の視野』, 日本放送出版協会, 1974年。
- 35) ピエール・ブルデュー, 山縣熙・山縣直子訳, 『写真論 その社会的効用』, 法政大学出版局, 1990年。
- 36) ジョン・ロック著, 大槻春彦訳, 『人間知性論』(一), 岩波書店, 1972年。
- 37) 吉井宏, 「空間認識の方法と発達について」, 『美術教育学』第4号, 1982年, pp.21-33。
- 38) 吉井宏, 「空間認識の方法と発達について—その(2) —オノマトペの発生と構造—」, 『美術教育学』第5号, 1983年, pp.89-99。
- 39) Dewey, J., *Art as Experience*, Capricorn Books, 1934. (鈴木康司訳『芸術論—経験としての芸術—』春秋社, 1969年。)

- 40) Dewey, J., *Experience and Nature*, Dover Publications, 1925. (帆足理一郎訳『経験と自然』 春秋社, 1959年。)
- 41) 文部科学省, 『学習指導要領データベース』 学習指導要領データベース作成委員会, <http://www.nier.go.jp/guideline/index.htm> (データベース完成日 2001年3月31日, 最終訂正 2007年4月30日)。
- 42) 文部科学省ホームページ, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/05/30/1306108.pdf, 2011年。

謝辞

本研究の執筆に際しては、多くの方々のお世話になりました。特に、主指導教官である西村俊夫先生（上越教育大学）には、多くの時間を割いて頂き、温かいご指導の下、博士論文を完成まで導いていただきましたことに深く感謝しお礼申し上げます。

そして、学位論文の審査委員として、高石次郎先生（上越教育大学）、松本健義先生（上越教育大学）、初田隆先生（兵庫教育大学）、泉谷淑夫先生（岡山大学）には、それぞれのご専門の立場から貴重なご意見やご指導を賜りましたことに、心より感謝しお礼申し上げます。また、副指導教官として、高石次郎先生、福本謹一先生（兵庫教育大学）には、貴重なご助言を賜りましたことに感謝申し上げます。

最後に、論文執筆を支えてくれた妻と家族にも感謝します。

2013年9月

西園 政史